

霊峰伊吹の麓にて

伊吹山は、近江、美濃の国境に聳える半独立峰で標高は一三七七・四m、滋賀県の最高峰です。その名は「息吹き」を意味し、古くから霊気を吐き、息づく神の坐す霊山として信仰を集めてきました。冬晴れの日、純白に輝く存在感の溢れる山容を近江のあちこちから仰ぐことができます。



伊吹山遠景

あの山の向こうは東国。恐れと期待の入り交じった未知の世界が広がっています。

いにしえの人にとつて、伊吹山は、西と東を分かつ境に聳える、ランドマークであるばかりでなく、伊吹山麓はまさに、西と東の文化が対立し、或いは融合する場所だったのです。

「近江歴史探訪マップ4」では、この伊吹山麓、坂田の地に営まれた歴史を(城・(街道)・(山の寺)をキーワードにひもといて行くことにします。

日本武尊・伊吹弥三郎

日本武尊は、五・六世紀頃までの大和朝廷勢力の全国への拡大という歴史を象徴する、古来最も愛された神話上の英雄で、最近ではスーパードンファン舞伎の演目にも取りあげられています。

『古事記』景行天皇段によれば、日本武尊は景行天皇の皇子で、



伊吹弥三郎



伊吹山神と日本武尊

天皇の命により、西国の熊蘇健二人を始め出雲健を滅ぼし帰還するや、直ぐに東国征討を命ぜられ、伊勢神宮にて倭比売命から草那芸劍他を賜り、尾張国で美夜受比売と婚約。その後、東国の蝦夷や荒ぶる神々を次々に滅ぼし、尾張に戻り比売と結婚。その翌日、「伊服岐(いぶき)」の山の神の征討に赴きますが、ここで白猪と化した伊吹山神が降らせた氷雨に敗れ、伊勢の能褒野に崩じます。

日本武尊は、往路は近江を通らずに伊勢神宮を経由して、東国に入り目的の大半を達するかに見えますが、復路、東国との境の神である伊吹山神の前に脆くも敗れてしまいます。

一方、伊吹弥三郎は鎌倉時代の地頭ですが、悪行の数々を働いたことで知られ、佐々木信綱に滅ぼされた後、いつしか、伊吹山の悪霊と見なされ、大江山の「酒呑童子」と交錯し、「伊吹童子」と呼ばれるようになります。

これらの伝説は、中央にとつて、伊吹山神が強大な霊威を振るう神として畏れ敬われ続けていたことを示しています。このような畏敬の念は、伊吹山中腹に数多く営まれた天台系の護国寺と呼ばれる「山の寺」の造営に引き継がれてゆくと考えられます。

平安京の鬼門の守りとして、比叡山延暦寺が崇敬を集めたことは良く知ら



都の鬼門

れています。御所と延暦寺を結ぶ線を延長させると、偶然かも知れませんが、伊吹山の山頂に至ります。もしかすると、伊吹の神を鎮めるために延暦寺が建立されたのかもしれない。いずれにしても、伊吹の神の地に寺を造営することには、国家の安寧を祈る気持ちも込められていたのでしょう。

三関

三関とは古代の街道に設けられた最も重要な関所で、北陸道の「愛発関」、東海道の「鈴鹿関」、東山道の「不破関」を指します。この三関の位置を示したのが次頁の図です。愛発関は近江と若狭の国境に、鈴鹿関は近江と伊勢の国境に、不破関は近江と美濃の国境にあることが判ります。古代の近江は「畿外」つまり中央からは離れた国として編成されていますが、中央と遠国との境を守る施設が「関」であるとすれば、三関の位置は、近江の国境が、当時の中央と遠国の国境として意識されていたことをしめています。

古代の東国への道には、東海道と東山道の二本があります。現在では東海



不破の関

道が幹線道として機能しています。しかしこれは、木曾川、揖斐川、長良川等のデルタ地帯の道が整備された近世以降のことであり、古代・中世においては、東山道が畿内と東国を結ぶ最も重要な道でした。近世には、中仙道と名前を改められた。「街道」には、番場・醒ヶ井・柏原等の宿場が置かれて栄えることとなります。現在でもここには国道二一号线、名神高速道路、JR東海道本線、東海道新幹線が通る、全国有数の要衝の地となっています。



三関の位置

### 壬申の乱と天武天皇・聖武天皇

壬申の乱は、天智天皇の死の翌年の六七二年に起きた皇位継承を巡る古代最大の内乱です。大海人皇子は、大友皇子が皇太子となったのを期に、大津宮を離れ吉野に入り、機会を窺い、天智天皇の死の約半年後に挙兵します。大海人は挙兵に際し、伊賀、伊勢を経由して美濃国の「湯沐（とうもく）（大海人の個人

的な所領）」から兵を集め、不破関を堅め、さらにここを拠点として東海道、東山道の兵を動員します。これに対して近江朝廷方は不破の関を越えて兵員動員の使者を東国に送ることができず不利な状況となります。東国の兵力を結集した大海人は不破に留まり指揮をしますが、軍は不破関から近江に侵攻し、各地の戦いで近江軍を破り、大津宮を落とし、乱は終結します。

この戦いのポイントは、近江美濃国境付近の「安八磨郡（あはちまぐん）（岐阜県大垣市付近）」にあった、天皇家にゆかりの豪族達をいかに早く味方に引き入れるかということにありました。つまり、西と東の狭間を押さえることが古代日本を支配することに繋がったのです。

壬申の乱の約七〇年後、この地域を巡る重要な出来事が起きます。天平一二年（七四〇）、聖武天皇は、九州の地で勃発した「藤原広嗣の乱」から逃れるかのように東国巡行に旅立ちます。従来、この天皇の行動は謎とされ、「優柔不断なひ弱な天皇の気まぐれ」とい



あわづとんぐら 禾津頓宮の建物遺構

準備行動であり、その行動は、壬申の乱に際して天武天皇がとった行程を追体験したものと理解されるよう

になってきたのです。

聖武天皇は、壬申の乱の勝利を決定づけた西と東の狭間、不破の関の近くに「不破頓宮」を営み5日間も滞在し、近隣の豪族に位階を授け、自分への協力を求めています。これも壬申の乱に際して天武天皇が行った行動の再現とすることができま

このように、この地域は古代の日本にとって、安定した政権を維持するために、必ず掌握しなければならぬ地域であったのです。

### 天下を取る

中世に至ってもこの地域の重要性が揺らぐことはありません。なぜか天下統一を目指した戦国大名は東国に本拠を置いています。彼らがその目的を達成するためには必ず通らなければならぬのが伊吹山麓であり、数々の戦いが繰り返されました。

織田信長にとって、天下布武（東国の価値観（武家による政治体制）により西国の価値観（天皇を中心とした政治体制）を打ち破ること）により天下統一を目指すためには、近江を支配下



桃配山 家康最初の陣

に置くことが不可欠でした。このために信長は江北の雄、浅井氏と連合し近江の平定に乗り出します。しかし、この直後に浅井長政の裏切りに会い、事が頓挫するかに見えますが、体勢を立て直した信長は、二元亀元年（一五七〇）再び近江に侵攻します。これに対して浅井・朝倉連合軍は近江・美濃の国境に多くの「城」を築き対抗し、戦いを繰り返します。世に言う「姉川の合戦」です。この戦いに一応の勝利を納めた信長ですが、その後約三年余りの間近江、近畿を中心に天下統一のための苦しい戦いを強いられる事になります。（詳しくは近江歴史探訪マップ3「高島七頭と元亀争乱」をご覧ください）



関ヶ原 家康最後の陣

天下統一を目前にして信長は天正一〇年（一五八二）本能寺に倒れます。その後、豊臣秀吉による天下統一がなされますが、西国の価値観に立脚した豊臣政権は不安定であり、東国の価値観に立つ徳川家康との間で慶長五年（一六〇〇）天下分け目の戦いが繰り返されることとなります。戦いの場所は奇しくも伊吹山麓の関ヶ原です。家康は壬申の乱の故事に習い、大海人が陣を置いたという「桃配山」に最初の陣を置きます。彼は、この地域の持つ歴史的な意義を十分に理解していたのでしよう。この戦いに勝利した家康は、政治の中心を東国に移し、安定した治世を実現することになります。